

てんまつんじん



遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

御迎人形特集

正遷宮の御迎人形	3 頁
御迎人形スタンプリ	4 頁
歌舞伎と御迎人形	6 頁
北新地巡行	8 頁
HOPE協議会	11 頁
新連載 あの人この人も	11 頁
神職・巫女紹介	14 頁

係風進上
平成二十一年 盛夏

表紙解説に代えて

「天満社正遷宮浪華の賑」

関西大学図書館蔵 多色刷
大判三枚続 三五三×四八八cm
二世長谷川貞信筆

◆明治十一年の正遷宮

表紙の絵は、明治十一年（一八七八）の屋根替えに伴う「正遷宮（しようせんぐう）」の賑わいを描いたものです。正遷宮とは本殿の造営や修理、屋根替えなどに際し、御神体を仮殿に御遷した後、造営や修復を終えて再び本殿に御遷しすることを行います。

同年九月一日に「正遷座祭」が行われると、その翌日から、天満宮およびその周辺では、正遷宮を奉祝する氏子・崇敬者たちによって、賑々しく祝祭の行事が繰り広げられました。当初は二九日までの予定でしたが、あまりの賑わいぶりに、二四日になって、急遽一〇月二日までの「遷宮祝祭礼延期願い」を提出し認可されています。

◆二世長谷川貞信

描いたのは二世の長谷川貞信です。

幕末の嘉永元年（一八四八）に初代貞信の長男として生まれ、当初は小信を名乗りましたが、明治八年（一八七五）には二世貞信を継ぎ、昭和十五年（一九四〇）に亡くなるまで、数多くの浮世絵を残しています。

実は、昨年の天神祭ポスターに利用された「天神祭船渡御図」も、この貞信の絵です。昨年の当社報第五四号の表紙にも使用しています。同号の表紙解説でも触れましたが、貞信は、このほかにも「天満宮流鏑馬之神事」や、「天神祭お迎人形船図」などを描き、当宮に縁りの絵師でした。

◆相撲絵と役者絵

三枚続の右図には、役者の中村福助・実川延若・実川正朝と芸妓二名が描かれ、中図には、力士の松ノ音・八陣・響矢、左図には、芸妓二名と役者の市川右團治・嵐璃寛・嵐秀次郎、小さく浄瑠璃太夫の竹本綱太夫・竹本越路太夫が描かれています。いかにも正遷宮の賑わいに相応しい役者・力士・太夫・芸妓などの華やかな参拝風景を描きますが、左図の上部背景に描かれた当宮の様子も興味深いものです。境内には何本もの旗が立ち、吹き流しがなびいてい

ます。

余談ですが、このころの大阪相撲は、力士の待遇などを巡って、脱走力士たちによる分派活動がみられました。同年に和解がなり、この正遷宮直前の九月六日から一五日まで、大阪相撲が興行されています。大阪歴史博物館の飯田直樹氏は、この興行期間は、当宮の正遷宮の影響を受けたものだと推測されています（上方相撲絵の制作・出版と相撲史トピックとの相關関係についての研究）。たしかに、祝祭礼期間を延長せざるを得なかったほどの賑わいを考えると、相撲興行もそれを意識せざるを得なかったのでしょう。

◆正遷宮の御迎人形

ところで、当宮の正遷宮では、御迎人形が飾られる習慣がありました。いうまでもなく、御迎人形は木津川岸の当宮御旅所周辺の町々が、天神祭の船渡御を奉迎するために制作したものです。しかし、江戸時代を通じて数回行われた正遷宮には、当宮周辺に御迎人形が造り物とともに飾られる習慣がありました。

この明治十一年の正遷宮では、二四体の御迎人形が当宮周辺に飾られています。また、天満市場には、蜷

貝で作った「藤の棚」が、市の側には紙細工の「牡丹花壇」が、さらに当宮表門を出た天神筋町には「紅葉」が、当宮北側の大工町には「梅と松」の造り物が飾られました。当時は、これらの人形や造り物を訪ね歩くために、木版の案内図が数種類も出版されるほど、人々の話題になったのです。



正遷宮における御迎人形の展示

右頁に触れました通り、当宮の正遷宮には、境内外に御迎人形を飾って祝意を表す習慣がありました。

例年なら、天神祭の数日前に、御旅所周辺の町々で展示される人形が、数十年に一回の正遷宮の嘉年には、天満宮周辺に「正遷宮人形」として展示されるのですから、人々はこぞって人形巡りを行ったのです。

そのため、正遷宮人形の展示に際しては、人形の一覧や、展示場所の案内図が木版印刷されました。

図1は、本表紙に描かれた明治十一年の正遷宮に際し、当宮周辺に展示された御迎人形の一覧です。計二四体が描かれ、各人形の下部には展示の奉仕に関わった個人や町の名が書かれています。

また図の上部には、右から大工町の「梅と松」、市場の「蜷の藤棚」、市の側の「牡丹の花壇」、天神筋町の「紅葉」の造り物が描かれています。

この図1によって、どの人形が出品されているかを知ることができても、肝心の展示場所が判らねばしか

たありません。そこで図2の案内図が配付されたのです。

大川北岸に数多くの人形が並んでいることが注目されます。もちろん、



図1

境内にも「木津勘助」が配置されています。この図の範囲を越えた西方の「曽根崎新地」にも、佐々木高綱・関羽・狸々が飾られていました。

の造り物の場所も書き込まれています。

また、人形だけではなく、表門を出た「天神筋丁」と、その一筋西の「天神はし筋」の両側には幔幕が張り巡らされていることや、さきほど

このような木版の人形一覧や案内図は、明治十一年だけではなく、弘化二年（一八四五）の正遷宮にも発行されました。実は次頁にご紹介する「御迎人形スタンプリ」の台紙は、それを利用したものです。



図2

「御迎人形 スタンプラリー」 について

今年限りの展示

例年の天神祭には、当宮および周辺において、数体の御迎人形を飾ってきましたが、今年は特別に、大阪府有形民俗文化財に指定された全一四体を六会場に飾ることになりました。

昨年までは、当宮と帝国ホテル・花外楼、今昔館に六体を展示してきましたのですが、参拝者からは、「安倍保名はいつ出るのか」とか、「なぜ素戔鳴尊は何年も見られないのか」というご質問や、「御迎人形の全てを写真に収めたい」というご希望が聞かれました。そのような方々にとっても、今年はまたとない機会です。そこで、せっかく一四体全てを披露するので、ぜひとも六会場を巡り歩いていただこうと、「御迎人形スタンプラリー」を企画いたしました（その概要は次頁）。

「御迎人形」の登場

平安時代中期の天暦三年（九四九）に当宮が創祀されると、その翌々年に天神祭が始まりました。社頭の浜から「神鉾」を大川に流し、下流の漂着地をその年限りの御旅所と定めたのです（鉾流神事）。天神祭当日、御祭神は天満宮を出て、輿で氏地を巡幸したあと（陸渡御）、大川を船で御旅所に向かいました（船渡御）。一年に一度の渡御を祝う氏子たちによって天神祭が始められたのです。しかし、江戸時代初期になると下流の河岸には家が建ち並んだため、常設の御旅所を設けました。すると、御旅所周辺の氏子たちは、船渡御を奉迎するために「御迎船」を仕立てました。さらに、元禄期（一六八八～一七〇四）に元禄文化が華開くと、御旅所周辺の町ごとに豪華絢爛の風流人形を作り、御迎船に飾り立てました。これが御迎人形です。御迎人形のキャラクターの多くは、大坂町人に人気の文楽や歌舞伎などから採られています。

幕末の最盛期には五〇体を越えたといいますが、現在は、左記の一六体が伝えられるだけです（このうちの雀踊・豆藏を除く一四体が、大阪

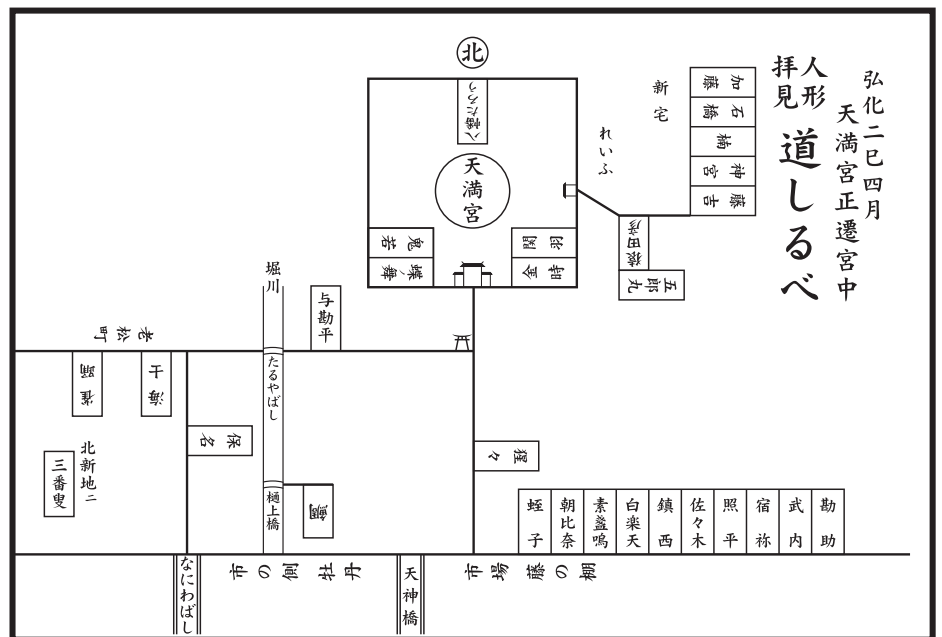
府有形民俗文化財に指定されています）。

八幡太郎義家・胡蝶舞 酒田公時・羽柴秀吉・木津勘助・三番叟・狸々・安倍保名・関羽・鬼若丸・与勘平・鎮西八郎・素戔鳴尊・佐々木高綱（実は真田幸村）・雀踊・豆藏

弘化二年の御迎人形

案内図

江戸時代の御迎人形は、船渡御の数日前から御旅所周辺の町々に飾られ、そのキャラクターを間近に楽しむことができました。また正遷宮には、当宮周辺で展示されたことは前頁に触れたとおりです。



現在の当宮本殿は、大塩平八郎の乱で焼失した後、弘化二年（一八四五）に再建されたものですが、その正遷宮に展示された御迎人形の案内図を左に掲げておきます。

御迎人形スタンプラリーの概要

― 展示の場所・期間・人形 ―

A 大阪くらしの今昔館
（住まいのミュージアム）
期間 6月27日（土）～7月26日（日）10時～17時 ※6月30日、7月7・14・21・22日は休館。入館は16時30分まで。

B 帝国ホテル大阪
期間 7月10日（金）～7月29日（水）8時～22時

C OAP（大阪アメニティパーク）
期間 7月10日（金）～7月29日（水）8時～22時

D 花外楼（北浜）
期間 7月13日（月）～7月25日（土）11時～16時
※ただし19・20日は除く。

E 大阪歴史博物館
期間 7月15日（水）～8月31日（月）9時30分～17時 ※火曜日は休館。入館は16時30分まで。

※金曜日は20時まで。入館は19時30分まで。

F 大阪天満宮
期間 7月23日（木）～7月25日（土）11時～17時

人形、鎮西八郎・素戔鳴尊・佐々木高綱（実は真田幸村）
※ただし、Aは300円、Eは大人600円、高大生400円（中学生以下は無料）の入場料が必要です。

《スタンプ台紙》

専用のスタンプ台紙は、右の六会場で配布しています。弘化二年（一八四五）の正遷宮を記念して刊行された木版の「御迎人形一覽」を模した台紙で、全スタンプを押し終えると、当時の木版が再現できるように趣向を凝らしています。

《景品の授与》

押印を終えたスタンプ台紙を、8月25日（火）から31日（月）の間に、当宮授与所にご持参いただきますと、もれなく記念品「御迎人形うちわ」を、また抽選により御迎人形「羽柴秀吉」のレプリカを授与いたします。



スタンプラリーの台紙（十四体の人形のマス目が、空白になっている）

歌舞伎と御迎人形 ——鬼若丸について——

今夏「御迎人形スタンブラリー」が開催されることについては、特集ページもありますので、皆様ご存知のことかと思ひます。

しかし、御迎人形の名前を聞いて、それがどんなキャラクターなのか、すぐに思い浮かべることができません。たとえば、一四体の有形民俗文化財の中には「鬼若丸」（スタンブラリーの台紙では「鬼わか」）がありますが、その名を聞いてすぐに、それがどんなキャラクターなのか、判る人は少ないでしょう。鬼若丸とは、実は源義経の腹心の部下、あの有名な武蔵坊弁慶の幼名なのです。

弁慶というと、現在では五条大橋での義経との出会いや、安宅の関での話などが有名ですが、実は、昔はその不思議な出生にも人々の興味が注がれていました。室町時代に書かれた『弁慶物語』から、その出生部分を抜き出してみます。

常の人は九月十月と限りとするに、この人は十月尼廿月過ぎ、三年にマズ生まれける。姿を見れば、世に超えて恐ろしく、常

の人の三歳ばかりにずありける。〔中略〕伏したりけるが起き上がり、東西をきつと見て、『あら明かや』と言ひて、からゝとぞ笑ひける。

一般には懐妊してから九ヶ月や十ヶ月で出産するにもかかわらず、弁慶の母は三年後に出産したこと、出生後の姿は恐ろしく、大きさも三歳の子供くらいあったこと、生まれるとすぐに起きあがり、東西をきつと見据えて「あら明かや」と言ったことなどが書かれています。弁慶は、生まれながらに鬼神としての性格を与えられたキャラクターでした。

このように、文学作品の中で弁慶はその不思議な出生と共に語られることが多々あります。では、歌舞伎においてはどのようなのでしょうか。御迎人形は、特集ページでも触れている通り、歌舞伎や能などの舞台芸術を基として作成されました。ですから、ここからは歌舞伎に登場する鬼若丸についての考察を行うことにします。

弁慶が登場する歌舞伎といえ

「勧進帳」が真つ先に頭に浮かびますが、これは主に「武蔵坊弁慶」という、剃髪後の弁慶が登場する話です。「鬼若丸」としての弁慶について考えるからには、弁慶と名乗る以前の彼が出てくる演目、すなわち『鬼二』『鬼一法眼』などについて考えなくてはならないでしょう。

江戸時代の歌舞伎上演状況を知るための資料『歌舞伎年表』（下段の〔注〕参照）によると、享保（一七一六―一七三五）から天保（一八三〇―一八四三）にかけての、大坂におけるこれらの演目の上演は、だいたい以下の通りです。

並べてみると、享和二年頃から文化三年にかけて、五年間に三度も『鬼一法眼』が上演されたことが判ります。『歌舞伎年表』による



〔金水敏氏撮影〕

主人と別れて単独で働いてきた御迎人形の鬼若丸ですが、今年、ようやく主人と出会えます。阪大石黒研究室と三菱重工が共同開発したコミュニケーション・ロボットの wakamuru が、今年の天神祭では牛若丸の装束で阪大船に乗船するのです。牛若丸と鬼若丸がそろった今年の天神祭は是非ともお楽しみ下さい。

（高嶋 藍）

〔注〕寛政七年（一七九五）	「鬼一法眼」
寛政七年（一七九五）	「鬼二」
享和二年（一八〇二）	「鬼一法眼」
享和二年（一八〇二）	「鬼一法眼」
文化三年（一八〇六）	「鬼一法眼」
文政四年（一八二二）	「鬼二」
文政十一年（一八二八）	「鬼二」
天保八年（一八三七）	「鬼二」

今年のフレーム切手 は 御迎人形

今年で三年目となる「天神祭フレーム切手」も、「御迎人形スタンブラリー」にちなんで、御迎人形をテーマに致しました。八〇円切手に採用したのは、シート上段、右から鬼若丸・関羽・酒田公時・安倍保名・素戔鳴尊・下段、右から木津勘助・佐々木高綱（実は真田幸村）・鎮西八郎・羽柴秀吉・八幡太郎義家の一〇体です。

市内の郵便局で一二〇〇円で販売しています。



星愛七夕まつり



平成元年から始まった「星愛七夕まつり」も、今年で第二十一回目を迎えます。天神祭のプログラムとして、地域にとけ込んだ祭りに発展してきました。

同まつりは、平成七年に復興された本殿祭儀としての「天満天神七夕祭」の、神賑行事として位置づけられ、年々盛大になっていきます。

今年も七月七日には、ファミリーからカップル、ご年配の方まで一万五千人余の参拝者が訪れて、呼び物である七つの茅ノ輪をくぐったり、

お願い事を短冊に記して大笹に結んだり、思い思いに星に願いをかけられていました。

午後三時の本殿祭儀を皮切りに、諸行事がスタートし、賑わいを増した境内の特設ステージでは「天神天満街道芸祭」の本選や、扇町高校吹奏楽部が浴衣で演奏するなどしました。

ステージの最後は大阪市内出身の新人シンガーソングライター「日比直博」の奉納ミニライブが行われ、また日比直博さんは当宮神職の知人でもあり、この度の出演に併せて2nd



ミニアルバム『愛情色鉛筆』を発売されました。その記念として、まず当宮で御披露されることになったのです。午後八時からのステージでは新曲をはじめ四曲を元氣いっぱい、歌い、集まったファンやはじめての方々がステージ周辺に群がって大変な盛り上がりを見せしていました。

このライブの後には本殿前で参拝者全員が参列できる「諸願成就祈願祭」が斎行されました。これにも日比さんは奉仕者代表の一人として参列し、新アルバムを自ら奉獻してヒット祈願も併せてお祈りされました。

続いて参列者全員は神職巫女の先導で七つの茅ノ輪を順にくぐり抜け星合池の神籬に降神されている天棚機売女大神を拝礼して池の畔で一夜の余韻に浸っていました。

鳳神輿、獅子舞の

「北新地巡行」

七月二十三日午後八時から、鳳講と天神講獅子が、北新地上通り、本通りの巡行を行います。これまでも同日には、大阪ビジネスパークにおいて天神祭前夜祭が行われてきましたが、今年は新たな神賑行事が加わったというわけです。

「北新地巡行」と題して催行されるこの行事は、北新地、いわゆる堂島地域の皆様と天神祭にご奉仕をされる講社・講員の願い、思いにより実現に至りました。

戦前は御堂筋を越えて

今はご存じの方も少なくなりましたが、昭和三十年代後半までは、陸渡御は御堂筋を渡り、その西に広がる北新地も巡路となっていました。

大正から昭和初期にかけては、南五花街、堀江、新町、北新地など大阪花街の芸妓らが八処女（やおとめ）

に扮して渡御列に参加し、後年には人力車またはオープンカーに乗るなど、大変な賑わいをみせていました。

しかし、第二次大戦により、やむなく天神祭は中断しましたが、戦後の混乱期のなか、氏子を始め多くの方々の熱意により昭和二十四年には復興されました。この復興を境に、北新地への陸渡御も再興されたのですが、昭和四十五年の大阪万博開催に併せて、新御堂等の道路整備計画が進められ、警備上、渡御列の御堂筋横断が困難となり、昭和三十六年を最後に北新地への陸渡御は途絶えたのです。

地元の熱意

北新地への陸渡御が途絶えてからも、現在に至るまで、堂島地域の方々は祭への協賛金はもとより、講への御祝儀など、天神祭への協力を惜しみなく続けられました。

しかし、往時を知る古老の方々が少なくなり、その一方で、新しく北新地に店舗を構える飲食店が増えたため、堂島地域と天神祭、或いは神社との関わりに対する意識が希薄になる傾向がありました。

このような事情のなか、往時の陸渡御を知る方々や、それを伝え聞い

た方々から、お渡りの復興を願う声が寄せられるようになりました。そして本年一月八日に斎行された「北新地えびす詣招福行列」が呼び水となって今回の北新地巡行が実現したのです。

えびす詣招福行列

「えびす祭」は、平成十九年一月に約六十年振りに復興致しましたが、復興三年目に当たる本年は、北新地社交料飲協会様より、初代北新地クイーンが選出された事を機に、大阪天満宮青年親睦会が主催団体として計画を進めて、「北新地えびす詣招福行列」が斎行されたのです。

行列は、人力車六台、樽神輿など、総勢百名近くの方々のご奉仕により執り行われ、先頭の赤い人力車には、桂春團治師匠が御奉仕され、つづいて北新地平田席の芸妓さんや、北新地クイーンらが人力車で続きました。

この「北新地えびす詣招福行列」により、堂島地域の皆様を始め、芸妓さん、また社交料飲協会様等との繋がりが再構築され、此度の北新地巡行を実現させることになったのです。これを機会に、陸渡御列そのものの北新地巡行が復活出来ることを期待したいものです。

大阪天満宮献詠 風月社

平成二十一年上半期秀歌

着飾りてミカ宮富の親仔牛
宮詣ですも丑歳の春

選者 浅井與四郎

梅かをる北野の宮の丑の春
詣つるよすが幸ひを受く

幹事 佐野 秀子

松風の音さやかなり丑年の
初春迎へ強くあゆまむ

幹事 森本美也子

丑歳の妻は還暦病なく
太極拳の道場へ行く

幹事 松村 曉二

丑歳に蒼生安寧謳はれし
總理の理念の成就を願ふ

堺 永田 民子

丑歳の絵馬舁めける寒日和
孫の受験の合格祈る

大阪 大北 滋保

東風にのり孫の大學合格の
報せ届きぬ梅かをる朝

東大阪 中山 里江

満開の梅を賞でつ、歌友と二人
夢語る背に陽ざしやさしき

東大阪 宝蔵寺京子

「鎮花祭」 神賑行事

万花咲き誇る春の季節は、人々の心もつい緩みがちで、様々な災厄が生じやすい時期でもあります。

私たちの祖先はこれを花の精霊の仕業と考えました。そこで奈良時代の「神祇令」に、舞い散る花に乗って四方に飛び行く精霊を鎮め国民の平安を祈念する鎮花祭（はなしずめのまつり）が国の公祀として規定されたのです。

当宮でも古くから厳肅に斎行されてまいりましたが、今年も四月二十五日の祭典を中心に雅楽・武道演武・舞踊など様々な神賑行事が奉納されました。

管絃 大阪天満宮神職
太食調 音取

「合歓塩急」
「抜頭」

神楽 大阪天満宮神職・巫女

浪速神楽 「式神楽第二」

神楽 「紅わらべ」

浪速神楽 「剣舞」

祭祀舞 「朝日舞」

社伝神楽 「珍らしな」

浪速神楽 「鈴扇」

舞楽 関西雅楽松風会

左方 「裏頭楽」

右方 「埴破」

退出音声 「長慶子」



朧月川面にゆらぐ大川の

夜櫻愛でつ、花見船ゆく

大阪 松村龍太郎

職はなれ失意の底に沈めるを

なぐさむごとき照る朧月

吹田 岩城 富子

菅公を待ち侘ぶるごと咲き初むる

梅にかかれる丑歳の雪

神戸 鈴木 敬子

つつがなく丑歳明けり神苑の

臥牛輝き吉事あらなむ

大阪 金生 久夫

白梅の香り豊かにただよひて

東風ふく庭は春の氣深し

京都 塩小路光孚

松ヶ枝につもりし春の淡雪も

梅の香のして東風にとけゆく

京都 塩小路淳子

東風よ吹け新しき芽よ伸びゆけよ

いきいき春も近みつつあり

大阪 西脇 かつ

見上ぐれば朧月夜に八重櫻

疊の上に花の蔭さす

西宮 牛田真理子

散る花を灰かに照す朧月

過ぎ行く春を惜みつつ眺む

大阪 中瀬 央子

せはし世に牛の歩みは遅くとも

ひと足ごとに止まず進まむ

橿原 柳野 等

近藤南州先生の著書

奉納される

猶興書院(『てんまてんじん』第五号)をごらん下さい。

今年奉納されました書籍は、南州先生が中国の絵画論を撰び叢書として刊行した『蜚雪軒論畫叢書』第一輯(明治四十三年刊)十部三十冊と第二輯(明治四十四年刊)百部三百冊、先生の古希を祝して門人たちが先生の七律の詠物詩などをまとめて刊行した『蜚雪存稿』(大正八年刊)四十五部四十五冊、そして先生の没後に出版された遺稿集『南州先生詩文鈔』(昭和六年刊)二十二部六十六冊であり、それに加えて『蜚雪軒論畫叢書』の版本六枚も奉納されました。

近藤南州先生の旧蔵本約二万冊が当宮御文庫に収められている御縁での奉納となりました。南州先生については水田紀久氏「近藤南州先生と



奉納された書籍を囲んで
左より中尾重宏氏、中尾良男氏、寺井種伯宮司、近江晴子研究員

大阪の漢学者として藤澤南岳先生と並び称された近藤南州先生については、研究があまり進んでいないのが実情です。前回奉納された自筆稿本を含めて、当宮とのゆかりの深い先生の貴重な研究資料として大切に保管し、今後活用していただけるようにと切に願う次第です。

中尾堅一郎氏は
七月十日、ご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈り致します。

『もてなし』の

まちなみづくり

～HOPEゾーン協議会～
会長 八十島義郎

昨年六月、大阪市の「HOPE(ホープ)ゾーン」事業を、天満地域で主体的に進める組織として、「天満地区HOPEゾーン協議会」を設立しました。天満らしいまちなみを継承し、地域の魅力を高めていくことを目的に活動を進めています。

具体的には、「まちなみ検討ワークショップ」や、大阪天満宮の「流鏑馬神事」における「まちなみ形成プロジェクト」などの活動を通して、地域の皆さんとともに「天満にふさわしいまちなみとは何か」「それを実現させるには、どんなことをすればよいか」と検討を重ねてきました。そして、この五月の総会で、行政や専門家の協力も得て作成した「まちなみガイドライン」(案)を、地域の皆さんに承認いただきました。

まちなみガイドライン

「まちなみガイドライン」は、天満地区における、まちなみづくりの指針として作成したものです。その

津端道彦画伯

孫・曾孫・玄孫のみなさん

おそろいで来宮

平成十九年二月に津端道彦画伯の曾孫、内谷伸子さんが御夫君泰彦氏と来宮され、当宮にある道彦画伯の作品をご覧になったことは社報『てんまてんじん』第五二号に掲載致しました。

今回、平成二十一年五月二十六日道彦画伯の孫の浜川眉美さん(アメリカ在住、伸子さんの母上)、曾孫の内谷伸子さん(とカール・ジェンキンスさん、玄孫のザッカリ・ジェンキンスさんとテラー・ジェンキンスさんの五名と伸子さんの御夫君泰



津端道彦画伯と長女智恵さん(前)と次女福さん
智恵さんが浜川眉美さんの母上
明治末ごろの撮影か

彦さんと総勢六名で来宮され、幣殿・拝殿・参集殿・梅花殿・会館館の間などをめぐって、画伯の作品と対面されました。参集殿上段の間に掛けられた「天神画像」や並べ置かれた二面の衝立(春「蘭陵王」・秋「駒迎」など、遥かなご先祖さまの作品を前にして、玄孫の若きアメリカ青年ご兄弟は、感慨深げでした。

浜川眉美さん(昭和五年生)は幼少の頃、道彦画伯の晩年に鶴見のお宅で母さんの智恵さん(道彦画伯長女)といっしょに一時暮らされており、おじいさんのことはよく覚えておられるとのことでした。



【参集殿にて】左から 浜川眉美さん、ザッカリ・ジェンキンスさん、カール・ジェンキンスさん、テラー・ジェンキンスさん、内谷伸子さん、内谷泰彦さん

概要は次の通りです。

天満は、平安時代に当宮が鎮座して以来その門前町として発展し、江戸時代には大坂三郷の一つ、天満組と呼ばれた歴史ある町です。天神祭をはじめとする四季折々の祭りや、大川浜の水と緑が、まちなみに彩りを添え、菅原町を中心とした地域には、町家や蔵が集積しています。また、天満宮北側の大工門周辺は、天満天神繁昌亭や商店街とつながり、独特の賑わいを見せています。

これらの資源・魅力を活かすために、『もてなし』のまちなみづくりをテーマとしました。この地域

あの人もこの人も 第一回

天神筋町中岡勝さん

今号から、当宮の氏子・崇敬者の皆さまをご紹介させていただきます『あの人、この人も』の連載を始めます。

人選は編集局の気まぐれで、順不同にお願いさせていただきますこと、ご容赦下さい。

ということで初回は、HOPEゾーン事業でも活躍されています中岡勝さんにご登場いただきます。

中岡さんは現在、天神筋町の町会

を訪れる人に笑顔で声をかけ、まちなみの魅力を語る、『もてなし』の心を持って「まちなみづくり」を進めていこうということです。

このテーマの実現に向けて二つの具体的な取組みを考えました。一つは、町家や蔵などの、天満らしい昔ながらの建物を受け継ぎ、新しい建物もそれらと調和させる。そのことによって、地域の「つながり」を重視したいということです。

もう一つは、祭りや四季にちなんだ飾り付けを行う「しつらい」の空間を各戸の玄関周りにつくり、また祭事などの際には幔幕を飾り付ける。

長でもあり、天神祭では鳳神輿講の役員さんでもあります、当宮のすぐ近所にお住まいですから、お孫さんを境内にお連れになるお姿をよくお見かけし、私たち神職・巫女もたいへん親しくして頂いています。

お顔からうかがえる通り、とても穏和で優しくゆったりされた方ですが、その行動力は、若い方たちに負けていません。何ごとに対しても積極的に行動され、てきぱきと片付けていかれま



老松神社の御修理

老松神社の由緒

当宮境内には摂社・末社・所管社など、三十座の小社がお祀りされていますが、このうち本殿の西南に位置する蛭子門の横に鎮座するのが「老松神社」です。
平成二年に、氏子地域の西天満か



ら当宮境内に移座したものです。御祭神は、神功皇后と住吉の三神がお祀りされています。

古く神功皇后が「三韓征伐」から還御の時に、この地に上陸され、大きな松の下陰に波風を避けられたとの故事に基づき、貞観二年（八六〇）に創建されたと伝承しています。

神功皇后は、仲哀天皇の皇后で、『日本書紀』では氣長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）・大帯比売命（おおくさながたらしひめのみこと）・大足姫命（おおくさながたらしひめのみこと）・大足姫命皇

后と記されています。父は開化天皇玄孫・息長宿禰王（おきながのすくねのみこと）で、母は天日矛裔・葛城高類媛（かすらきのたかぬかひめ）・彦坐王の四世孫、応神天皇の御母君です。

『日本書紀』などによれば、二〇一年から二六九年まで政事を執りおこわれ、夫の仲哀天皇の急死（二〇〇年）後、住吉大神の神託により、お腹に子供（のちの応神天皇）を妊娠したまま、海を渡って朝鮮半島に出兵して新羅の国を攻め、新羅は戦わずして降服して朝貢を誓い、高句麗・百済も朝貢を約したといえます。世にこれを「三韓征伐」と称しました。

今回の御修理

平成二年に遷座した当時の社殿は、それまで使用していた末社の社殿を改装して充てていました。

その後は、さしたる損傷も無い状態でしたが、遷座から二〇年の長い年月には、外周の塗装はかなり傷みが目立つようになり、このたび御屋根より下の外側の塗装を主に、内部の装飾なども旧社地である西天満地区の老松町三丁目町会の御奉納によって新調されました。



《仮遷座》 工事に先立って御内見之儀を行い、準備のできた四月五日に御神霊は御本殿の相殿第五殿を御仮殿としてお遷し申し上げました。それから約三週間にわたる工事が行われ、最終の乾燥時期を含めると約一ヶ月の工期となりました。

《正遷座》 工事も無事に終了し、内陣の装飾も完了した五月一日の夕刻から本殿遷座祭を執行し、浄間となる頃に御神霊は新装なった元の御社殿にお還りになりました。

また五月十日には例祭を斎行し、御縁ある老松町の住民をはじめ西天満の方々が大勢参列されていました。

大阪天満宮

浪速菅廟吟社

当漢詩会は、当宮の手厚い庇護の元に悠々百二十六年の伝統を持って運営を致してまいりました。

創始者は浪速の碩学と言われまし藤澤南岳であり、菅原道真公の文徳を慕い、当宮に詩筵を開かれたのが最初であります。

当初は今日とちがいでまして、漢学も盛んで有りましたし、漢詩作りにも素養の有る方が枚挙にいとまがあら

りませんでした。

漢詩は、明治・大正・昭和と繁栄いたしましたが、先の大戦の終焉により、世間的には漢文・漢詩というものが過去の遺物のようになっていました。それと食糧難とか様々の障害がありました。このような現実を憂慮されました当時の当宮顧問（故安岡正篤先生の肝いりで、途絶えかけていました漢詩会を再興。各地から漢詩人が集結され盛大な詩会が挙行されました。

その後も紆余曲折が有りましたが、毎月第一日曜日には当宮に参集いたしまして、作詩と勉強会を致しております。

浪速菅廟吟社代表代理

雪稜 松村曉二

浪速菅廟吟社詠草

雪稜 松村曉二撰

二月課題

秋鳳 樋口 達彦
世情荒廢此迎春 半夜圍爐多苦辛
寒氣依然貧戸外 試詩唯著墨花新
（訓読）世情は荒廢してここに新春を迎え、半夜炉を囲み苦辛の多し。寒気は依然 貧戸の外、詩を試み唯だ著く墨花の新たなるを。

〔語釈〕世情Ⅱ世の中の情勢。荒廢Ⅱ荒れ廢れる。半夜Ⅱ夜半。圍爐Ⅱ囲炉裏をかこむこと。依然Ⅱかわらずもとのまま。墨花Ⅱ墨でかいた花。

（詩意）世の中は荒廢したまま新春を迎えた。夜半囲炉裏を囲み苦辛の多いことを思った。寒気はいつまでもかわらず、特に貧戸には詩を試みまた墨花の新たなることを著した。

三月席題 「春窓微雨」分韻

秋甫 樋口 和子

春雨纖纖去又來 花顔含淚濕青苔
輕寒輕暖南窓靜 烹茗焚香拂硯埃
（訓読）春雨纖纖として去り又来たる、花顔涙を含み青苔湿う。輕寒輕暖南窓靜かに、茗を烹香を焚き硯埃を払う。

〔語釈〕纖纖Ⅱ細いさま。
（詩意）春の雨がこまかく降っている、それは美しい顔に涙を含むようにまた青い苔をうるおしている。寒さや暖さがこもごもやってきて、お茶を煮たり香を焚いたりまた硯の埃をはらった（静かな詩人の様子を詠んでいる。）

四月課題 「籬邊桃李」

琴鈴 和田 啓子
鮮白淡紅桃李枝 銜香片片入疎籬

童心趁夢遊鄉里 兒女摘花知是誰
（訓読）鮮白淡紅桃李の枝、香を銜んで片片疎籬に入る。童心夢を趁て郷里に遊ぶ、兒女花を摘む知るは誰ぞ。

〔語釈〕鮮白Ⅱあざやかな白。淡紅Ⅱ淡い紅。桃李Ⅱももやすもも。疎籬Ⅱまばらなまがき。

（詩意）あざやかな白淡い紅の桃と李の花、香りをふくんで片片たる籬に香っている。それは子供の頃の故郷を夢の中に見る。幼い少女（作者）の花を摘む姿を知っているのは誰であらうか、私である。

四月席題 「花時出游」分韻

瑞峰 須磨 尚子

故山名利覓花尋 古樹垂枝值萬金
世上興亡歸夢裏 悠悠千載使人臨
（訓読）故山の名利花を覓て尋ね、古樹の垂枝は万金に値う。世上の興亡は夢裏に帰す、悠々千載人をして臨めしむ。

〔語釈〕故山Ⅱ故郷。名利Ⅱ名高い寺院。千載Ⅱ千年。
（詩意）故郷の名利へ花見に行く、枝垂れ桜の古樹はほんに価値がある。世上の興亡などは夢のように儚いもので、ただ桜は悠々として人々を見させている。



神職・巫女 紹介



- ① 欄宜 岸本政夫(52)
- ② 昭和56年4月1日
- ③ 渉外・奉賛
- ④ 常に平常心



- ① 権欄宜 糸数智子(51)
- ② 昭和51年4月1日
- ③ 役員室秘書
- ④ 日々感謝



- ① 権欄宜 堀井賢二(36)
- ② 平成5年4月1日
- ③ 祭儀奉養課主任
- ④ 魚釣り大好き人間です。



- ① 職・氏名・年齢
- ② 奉職年月日
- ③ 主な仕事
- ④ 何か一言



- ① 欄宜 米村昌彦(49)
- ② 昭和59年4月1日
- ③ 総務・院友会
- ④ 小さな事からコツコツと！



- ① 権欄宜 沖 圭司(52)
- ② 平成3年7月1日
- ③ 天満宮会館総支配人
- ④ 人間一生にする苦勞の量は皆同じだそうです。若いうちに苦勞をして老後に楽しめましょう。



- ① 権欄宜 菅尾慶太(37)
- ② 平成5年4月1日
- ③ 総務課
- ④ 天満宮へご参拝の際は、お気軽にお声がけ下さい。



- ① 権宮司 寺井種治(45)
- ② 昭和63年4月1日
- ③ 社務所及び天満宮会館全般
- ④ 神職として常に高い志と目標を持って、自分を高めて行きたいと思っています。



- ① 欄宜 栗辻 勲(45)
- ② 昭和61年4月1日
- ③ 神社財務及び財産管理
- ④ 神明奉仕



- ① 権欄宜 糸数昌史(48)
- ② 平成3年10月1日
- ③ 用度管理
- ④ いつも笑顔を保ち、神明奉仕する事を心掛けています。



- ① 権欄宜 津江憲典(34)
- ② 平成11年4月1日
- ③ 経理課
- ④ 参拝者には大阪天満宮にお参りして良かったと言ってもらえるよう御奉仕したいと思います。



- ① 欄宜 柳野 等(44)
- ② 平成4年2月13日
- ③ 祭儀部
- ④ お天気のいい日などふらっと来られるお宮になればいいなと思っています。



- ① 権欄宜 園 博年(39)
- ② 平成5年4月1日
- ③ 事業課主任
- ④ 「千里の道も一歩から」を旨に、ご指導ご鞭撻宜しくお願ひします。



- ① 権欄宜 万力康司(32)
- ② 平成11年6月21日
- ③ 秘書・広報課
- ④ 多くの人と交わり、様々な仕事を通じて成長したいです。



- ① 権欄宜 菅野喬紘(29)
- ② 平成14年4月1日
- ③ 祭儀課
- ④ 浄瑠璃の鏡のように清い心で社務に励みたいと思っています。



- ① 権欄宜 湯浅迪彦(24)
- ② 平成19年4月1日
- ③ 祭儀奉養課
- ④ まだまだ未熟者ですが、初心を忘れず神明奉仕に励みます。



- ① 巫女 向井弘美(25)
- ② 平成15年1月1日
- ④ 巫女の仕事で一番好きな事は神楽です。



- ① 巫女 小寺理加(24)
- ② 平成19年11月1日
- ④ 至らない所も多々ございますが、精一杯御奉仕させて頂きたいと思っています。よろしくお願いします。



- ① 権欄宜 川井義晴(29)
- ② 平成15年4月1日
- ③ 祭儀奉養課
- ④ 初心を忘れず神明奉仕に勤しみたいと思います。



- ① 参与 豊住律人(82)
- ② 昭和57年4月1日
- ③ 祭祀一般
- ④ 傘寿を過ぎて健康で勤めさせていただいていること有難く感謝します。



- ① 巫女 吉立紫穂奈(22)
- ② 平成17年4月1日
- ④ 十七年より御縁がありまして奉仕させて頂いております。どうぞよろしくお願い致します。



- ① 巫女 柴田 瞳(20)
- ② 平成20年4月1日
- ④ ご奉仕させて頂いて一年がたちました。これからも頑張っていきたいので、よろしくお願いします。



- ① 権欄宜 大橋弘邦(29)
- ② 平成18年4月1日
- ③ 秘書・広報課
- ④ 何も分かりませんが宜しくお願いします。



- ① 出仕 中村泰輔(26)
- ② 平成21年4月1日
- ③ 用度管理課
- ④ 未熟でわからない事ばかりですが身を引き締めて精進していく所存でございます。



- ① 巫女 岡田莉奈(21)
- ② 平成18年4月1日
- ④ まだまだ至らない所がございますが、成長出来ます様頑張りたいと思います。よろしくお願いします。



- ① 巫女 川端 麗(19)
- ② 平成21年4月1日
- ④ よろしくおねがいします。



- ① 権欄宜 中西 佑(24)
- ② 平成19年4月1日
- ③ 用度管理課
- ④ コツコツと頑張らせて頂きます。宜しくお願いします。



- ① 出仕 嶋田依与里(22)
- ② 平成21年4月1日
- ③ 出仕業務
- ④ 一生懸命ご奉仕させていただきます。と思っています。よろしくお願いします。



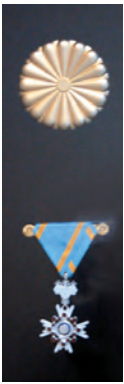
- ① 巫女 林 理恵(21)
- ② 平成17年4月1日
- ④ 参拝に来られる方の為にも精一杯ご奉仕していきたいです。



- ① 巫女 松岡香江(19)
- ② 平成21年4月1日
- ④ まだわからない事もあります。これから頑張っていきたいのでよろしくお願いします。

● 供船講 橋本講元 叙勲 ●

当宮講社連合会、供船講の講元である橋本俊一氏が、今春の叙勲において、淀川左岸水防事務組合在席五十五年、また、水防団西島水防分団長在任十五年の水防功勞により、畏き迎りから、「瑞宝単光章（ずいほうたんこうしょう）」に叙せられ、去る六月三日には、奉告の参拝にお越



しにられました。

受章にあたりご夫婦ともに宮中に参内し拝謁を賜り、ご本人は「これまでの人生で、これほどうれしく、また、名誉な事はございません」と感激に耐えない様子でした。

橋本氏は、例年の天神祭船渡御においては、供船講の講元として、供奉船、奉拝船の手配を行うとともに、自ら監視艇に乗船され、渡御列の整理誘導にご尽力いただいております。どうぞ今後もご健勝にてご奉仕賜りますようお願い致します。

■ 人事任免 ■

《新任》

平成二十一年四月一日付

出仕 中村 泰輔

出仕 嶋田 依与里

巫女 川端 麗

巫女 松岡 香江

《退職》

平成二十一年一月三十一日付

巫女 加美山 貴与子

平成二十一年三月三十一日付

巫女 堀川 智世

《転任》

平成二十一年三月二十日付

権欄宜 稻住 祝人

（自社 應感神社へ）

平成二十一年三月三十一日付

権欄宜 渡邊 信敏

（自社 熊毛神社へ）

編集後記

本号は、はからずも「御迎人形」特集になりました。

寺井種伯宮司の発案による「御迎人形スタンプリィ」がきっかけとなり、今年は、天神祭ボスターにも

パンフレットにも、フレーム切手にも御迎人形が採用され、テレビや新聞がこぞって報道し、まさに「御迎人形年」の様相となりましたが、その影響で本社報も特集を組むことになったものです。

天神祭パンフレットの表紙には、寺井宮司が「伝統の継承と新たな試み」と題する一文を寄せていますが、今回のスタンプリィの企画は、まさに天神祭らしい、過去の伝統を継承した新たな試みの典型といえます。

文化研究所において長く研究員を務められた永原順子さんが、去る四月から高知工業高等専門学校の准教授として転任されました。代わりに、大阪大学大学院文学研究科（日本文学）博士後期課程三年の高嶋藍さんが就任されました。

大阪天満宮社報

てんまてんじん 第56号

平成21年7月20日印刷

平成21年7月25日発行

発行人 寺井種伯

発行所 大阪天満宮社務所

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-8

TEL 06-6353-0025

印刷所 木村印刷株式会社